

若きメランヒトンの神学的関心

——ライプツィヒ討論から Capita まで——*

伊藤 勝 啓**

(昭和50年4月30日受理)

Young Melancthon and His Theological Concerns

——From the Leipzig Debate to the Capita——

by Katsuhiko ITOH

As a result of his bitter experience in the *Leipzig Debate*, Luther was urged to proclaim the *Schrift-Prinzip* (the biblical authority over the human traditions), which has ever since been one of the three major principles of Protestantism. Melancthon supported Luther with the conviction he had gained from successes of Humanists in the linguistically refined analysis of literature of classical antiquity and Christian writings, especially the biblical ones, taken for granted by historical criticism of Humanism. Melancthon had already enchanted Luther with such pure, simple and penetrating exegesis as to make the Bible speak with greater force. Melancthon himself departed from medieval scholasticism with a humanistic attitude, restored the knowledge of Christ for theology, and gave attention to the innovation or instauration of man, combining Lutheran doctrine of justification by faith with his own *affectus*-theory. In his process of cogitation, Melancthon was forming his theology of 'comfort and promise'. The Heidelberg Catechism later gave a beautiful formulation of 'comfort' (*consolatio*) at the First question: Was ist dein einziger Trost im Leben und im Sterben? (What is thy only comfort in life and in death?) The formulation and answer was the *a quo* and *ad quem* of the whole Catechism. On the other hand, the concept of 'promise' (*promissio*) has been partly absorbed in the idea of *Heilsgeschichte* (salvation history). Only general indifference has prevented our receiving the heritage of Melancthon's piety because of Luther's greatness and the later ungenerosity toward the happy diversity of the Reformation witnesses. Both Luther and Melancthon spoke to their age and continue to speak to our own age. They were once fellow-workers in Christ, and are now for us, also seen as evidence of diversity happily embodied in the history of the Reformation.

緒 言

マルティン・ルターがローマ・カトリック教会と決裂した翌年の1518年8月、フィリップ・

* この論文は昭和48年度文部省科学研究費の助成によったものの一部である。

** 北見工業大学一般教育等

メランヒトン (Philip Melanchthon, 1497-1560) はヴィテンバルク大学教養学部のギリシャ語教授として就任した。メランヒトンの行った就任講演『青年教育の改善について』¹⁾ は好評を博し、以後ルターとは友愛以上の絆で結ばれることになった。メランヒトンは正しい聖書理解のために、語学的方法と歴史批評的方法の重要性を力説してやまなかった。しかも彼はこのような人文主義的教育を実施するため、教育課程の改訂に取り組んだ。次に彼は、ルターやカールシュタットに伴って、懸案のエックとの討論に陰ながら参加すべく、1519年ライプツィヒに赴き、ルターを助け支えた。このライプツィヒ討論においてルターは、エックの巧みな弁論に乗せられて、遂に殉教の死を覚悟して教会・教会会議・教皇の権威に対する聖書の絶対的優位、いわゆる聖書原理 (Schrift-Prinzip) を公けにした。この決断にメランヒトンの影響が大きく働いた事を忘れてはなるまい²⁾。

そこで本稿において、聖書原理を支えるメランヒトンの認識と聖書理解の内実の特質を探ることとする。その際、資料としては、彼の *Epistola de Lipsica disputatione* (1519), *Defensio Phil. Melanchthonis contra Joh. Eckium* (1519), *Declamatiuncula in Divi Pauli doctrinam. Epistola ad Johannem Hessum Theologum* (1520), *Theologica institutio Phil. Melanchthonis in Epistolam Pauli ad Romanos* (1519), *Rerum theologiarum capita seu (Loc)* (1520) を用い、最初の三つの著作は Stupperich 編集のメランヒトン著作集 (StA と略記) に依り、残りの二つは Bizer の編集した *Texte aus den Anfangszeit Melanchthons* (BT と略記) に依って引用する。

I.

メランヒトンはエコランパディウスに宛てた『ライプツィヒ討論に関する手紙』において、瑣末な議題は省いて³⁾、主要な問題について報告しているが次の通りである。

- (1) 自由意志の問題⁴⁾
- (2) 教皇の権威の問題⁵⁾
- (3) 教会会議の権能の問題⁶⁾
- (4) 煉獄の問題⁷⁾
- (5) 贖宥の問題⁸⁾
- (6) 悔改めの問題⁹⁾
- (7) 恵みの障害 (obex gratiae) の問題¹⁰⁾

これらの諸点にわたって簡潔に報告されている。この手紙において、メランヒトンは殆んど討論に関する論評を控えているが、カールシュタット及びルターがローマ・カトリック側の論敵エックを相手にしてその論拠を聖書と聖書の主張を逸脱していない教父の言説に求めている事を告げている。しかしメランヒトンの目から見る時、例えば(7)の問題の場合カールシュタットとエックの論拠の正当性について、「…エックもカールシュタットともに沢山の選り抜きの

聖書の章句を用いて論争しました。もっとも私には、パウロのローマ人への手紙第7章がカールシュタットの見解を支持しなくもないように思われました¹¹⁾と云っている様に、味方のカール・シュタットに対して必ずしも全面的にその正当性を容認していないことがわかる。エックの論拠についてはなおさらその読み込みや拡大解釈を批判している¹²⁾。メランヒトンにとって——ルターやカールシュタットにとっても——聖書を論拠として用いるとき、エックが行った様な、聖書が教会の教理や教父の言説又教会会議に従属、乃至は並列される事は拒否しなればならなかった¹³⁾。この事は聖書釈義が御用学問的な実証のための技術ではなくて、いわば *norma normans* としての聖書が、真に語ろうとしているところの事柄を語らしめる技術として理解しようとした事の結果であった。聖書原理の基礎は、斯くして、聖書釈義の方法・機能・限界に対する新しい自覚を生み出したのである¹⁴⁾。

次にこのライブツィヒ討論において宣揚された聖書原理は、スコラ学のいわゆる冷たい思弁に対して、実際の・倫理的な生き方を要請した人文主義的理想を、そしてそのスローガン、*ad fontes!* の貫徹をその根幹に据えた。*Declamatiuncula in Divi Pauli doctrinam* なる一文は、メランヒトンが1518年の『青年教育の改善について』において取った古代哲学の評価とは違った認識に立って聖書の使信——特にパウロ——を古代哲学の理想やスコラ神学と対決させている。

II.

Declamatiuncula にあらわれたメランヒトンの認識について項目的に述べる事にする。

(1) 人間理解について¹⁵⁾

一般に人文主義者の人間観は楽観的で、スコラ神学が教会教理の論理的整合性に注意を傾けたのと対照的に、実際の・倫理的課題を第一義的なものと考えた。メランヒトンもその線上にあった。しかし、彼は人文主義のとした心身二元論のように心と身体、理性と肉体乃至は感性に実体的区別をするのをやめて、全体的人間 *totus homo* を考えようとしている。人文主義者のように人間の弱さを身体の領域に限定したり、心や精神がその影響を受けないと云う風には考えなかった。メランヒトンは次のように書いている。

「というのは自分自身の王国から罪の情念を追放する事はわれわれの自由裁量のうちにはなく、情念はあたかも難攻不落の要塞の如くに魂の奥深くに居所を占め、そこでわれわれの四肢に暴虐をふるうからである。それ故、……ある古代人たちは人間の理性を御者と考へ、馬を情念と呼んだ。しかし理性は情念に征服される。……この罪の力はキリストの恩恵によってのみ征服される」¹⁶⁾

「多様な貪欲 *cupiditas* がその暴虐をわれわれに行使する」¹⁷⁾

ここでは情念乃至は内的性向 *affectus* や貪欲が全体としての人間の存在をおびやかす、と主張

されている。メランヒトンは用語のうえて二元論的に見えるが、はっきりと統体としての人間存在の危機を見ているといえよう。従って彼は、「あるいは理性が、あるいは律法が反対を受けて、不幸にもわれわれは自身との不断の闘いを続けるのである」¹⁸⁾と語る。この *bellum ipsi nobiscum adsiduum* (われわれ自身との不断の闘い) という考え方はメランヒトンにとって当時のスコラ神学者の中に見出し得ないものであった。彼らは、「人間の精神は徳の追求へとかりたてられる……」¹⁹⁾と考えているが、メランヒトンはそれこそ夢想だ！ *O somnia!*²⁰⁾と云う。

(2) 哲学に対する態度の変化

メランヒトンは1518年の *De corrigendis* において古代哲学の歴史的意義を回復すべきことと、その倫理的意図を重視すべきことを説いたが、もしその哲学がキリスト教の啓示真理に合致しなければ、それから距離を置くべきだとした。この *Declamatiuncula* において更に哲学一般に距離を保とうとしている。

「少年時代には哲学者の作品に心をうばわれて、わたしは自分の精神に損害を与えた。いつの日かパウロの教えがそれを償ってくれる事を、わたしは望む。何故ならわたしの判断によれば、キリスト者の生の諸問題が哲学の作品のおかげをこうむると考えている人たちは全く誤っているからである。というのもキリスト教の教えのみ、心をかきたてこれに靈感を与える効果があり、これこそ使徒達がキリストの哲学 *Christi philosophia* を呼んで永遠の生命のことばとって告白したところのものだからである。ただキリストのみが、生命・真理・光・道なのである。その反対に人間の意見を彼らは死・虚偽・暗黒・誤謬と呼んだのであった」²¹⁾

こう云ってメランヒトンはいまさら哲学者の賢さから徳の形相や典型 *virtutis forma ac ὑποτύπωσις* を求めようとしても、すでに聖書 *Christianae literae* が救いのための近道 *iter compendiarium ad salutem* を指し示しているのであるから、それは狂気・盲目の沙汰だというのである²²⁾。人間の精神にはカタルシスが必要であることを理解したプラトン主義者達も、メランヒトンに云わせると、その根拠を明確に出来なかった。これが出来るのはキリストの恩恵のみであるといっている²³⁾。

スコラ神学が哲学の衣裳を纏って失ってしまった真理のために、メランヒトンは嘆くのである。

「神学の諸学派は何という大きな損害を受けつつ今日までパウロを無視して来たのか、私は戦慄して云うのだ」²⁴⁾

メランヒトンの嘆きは、スコラ神学がアリストテレスを擁してパウロを退け、はてはキリストの名 *Christi nomen* が殆んど捨てられかけている事なのである²⁵⁾。チュービンゲン時代にア

リストテレスの正しい本文を他の人文主義者と一緒に再建しようとしたメランヒトンに比して大きな変化を認めなければならない。

(3) キリスト認識の意義

メランヒトンがパウロを高く評価する理由は、パウロがキリスト認識の意義を最も深く理解している点である²⁵⁾。プロテスタントの最初の教義学といわれるメランヒトンの『神学総論』(*Loci communes*, 1521)の最初の《神学の根本概念或いは神学の輪廓》に記された、彼の名声を高からしめ、彼の非常に特徴的な定式である「キリストを認識することは彼の恩恵を認識することである」と云う表現を想起させ或はその萌芽的と云い得る発言がこの *Declamatiuncula* に登場する事実は重要である。

「確かにキリストを認識することは、彼の偉業を理解するだけではなく、感謝の心をもってその恩恵 *beneficium* を自らのものとするものである」²⁷⁾

ここでもメランヒトンはキリストのペルソナの問題や贖罪論の問題を知覚的把握に終わらせるのではなく *Christus pro me* あるいは *Christus pro nobis* の問題として考えていることがわかる。

(4) キリストの *beneficium*

メランヒトンにとってこの *beneficium* とは具体的に何を指していたのであろうか。彼はキリストが人間のために勝ち取ってくれたものは、「義と平和の恒久的勝利」(*iustitiae pacisque triumphum*)²⁸⁾ で、スコラ神学はこの勝利について無知である²⁹⁾、という。この勝利に伴ってキリストが世界に委託した二つの *beneficia* とは、すなわち、平安なる良心 *pacata conscientia* と人間の根源的性向乃至は情念 *affectus* を支配する精神 *animus compos affectum* なのである³⁰⁾。この点も無視されてきたと彼は云う。

メランヒトンはパウロ神学の優位(文芸や哲学に対する)を論じたあとで、パウロの書簡を読むことを通してのキリストへの *meditatio* と *animus* (精神)の *consolatio* (慰め)あるいは *oblectatio* (慰安)について語っているが³¹⁾、この *consolatio* という概念は初期のメランヒトンの神学思想ないしはその神学的関心の中で重要な意味をもってくる。そのことはあとで言及することにしよう³²⁾。

Declamatiuncula における若きメランヒトンはパウロ神学を媒介にして *Loci* の初版における展開の萌芽をわれわれに見せてくれる。その意味において *Declamatiuncula* はメランヒトンの就任講演 *De corrigendis* と並んで、そして後に述べる *Capita* と並んで、彼の神学形成の過程における重要な文献であり、注目しなければならないものである。

III.

若きメランヒトンの神学的関心が *Declamatiuncula* において概観されたが、教理的体系化という点においては *Theologica institutio Philippi Melancthonis in Epistolam ad Romanos*

(以下 Theol. Inst. と略記) と *Lucubratiuncula oder rerum theologicarum capita Philippi Melancthonis* (以下 Capita と略記) に一步譲らなければならない³³⁾。

Theol. Inst. においてメランヒトンは神学の主要概念として peccatum (罪), lex (律法), gratia (恩寵) の三つが最も際立って取りあげられている。これらの概念の選択の規範となったのは、《実際に役立つもの utilitas》³⁴⁾ という考え方であった。これらの三概念はルターの強調した義認論 Rechtfertigungslehre の確認である事を示している³⁵⁾。罪ある人間が義なる神の前で如何にして義人とされ、救われる事が可能なのか、という《人間の救い》に重点が置かれた論述の構成は、伝統的教義学とは著しい相違である事がわかる³⁵⁾。メランヒトンは、《人間の救い》を可能にするのはただ「キリストの恩恵」beneficia Christi³⁷⁾ であった。Theol. Inst. においては、Declamatiuncula におけるよりも明確に義認信仰をキリストの恩恵として語っている事に注目しなければならない。

(1) ローマ人への手紙でパウロが語ろうとしている事を、メランヒトンは lex morum (道徳律法), περὶ ἠθικῶν (倫理について), fides iustificans (義とする信仰) であって、儀式律法の定める業やキリストに関する歴史的知識にすぎない信仰 fides historica ではないと明言する³⁸⁾。

(2) 次にメランヒトンは以下の様に云う。

「更にパウロはこの手紙によってキリストとキリストの恩寵を世界に提示しようと欲していると思われる。それは真に正確な議論によってキリストがわれわれの義の創始者であることが正しく認識されるためである」³⁹⁾

ここにおいてもまたルターの影響下に立つメランヒトンの姿に出るのである。

(3) ここで述べられるキリストの義とは、彼の受肉と十字架の死において発揮され、a) 人間の罪責を償い、義の御霊 spiritus iustificans の働きによって、b) 人間の内的性向 affectus を新らたにする innovare、という⁴⁰⁾。これが I-III までの節でメランヒトンが述べているところである。(3) において広義のキリスト論と affectus 説とが結合しているところにメランヒトンの特徴的の思惟形式がある。つまりキリストにおける神の出来事とキリストにおける人間の出来事を同時に語る両極的の思惟形式である。

(4) さて IV-VII においてメランヒトンは人間の原罪 peccatum originale を人間の内的性向 affectus と律法 lex⁴¹⁾ の観点から論述する。メランヒトンは Declamatiuncula よりも一層深刻な人間観を獲得することになる。

メランヒトンは、lex は弱効の判決 sententia⁴²⁾ inefficax であるから affectus は lex によって制圧されたり追払われたりされる事は出来ない (VI) というが、それは人間存在のそれ自身の力による救済の道がない事、真の義の獲得がこの affectus の回復更新の可能性の存否にかかっている事を示している。

(5) この affectus の更新はひとえに神の恩寵にかかっている。御霊として働くキリストの

恩寵によって、人間の *affectus* は心の中に創造せられて、たとい *lex* がなくても、自ら進んで善なるものへと心が動かされる、といわれる⁴³⁾。

この *gratia* は二つの部分に分けられる。ひとつは *fides* である。メランヒトンは云う、

「信仰は神の言葉への絶えざる同意であり、それによってわれわれはその心を照らし出され、かつ神がわれわれに示めされる」⁴⁴⁾

大変美しく定義されている。第二は愛 *caritas* 乃至は *amor Dei* とこの *amor* から生れる希望 *spes* である⁴⁵⁾。更に X-XI の節において、いわゆる信仰義認に関する二つのテーゼが続く。即ち、*Ex fide iustificari* (信仰によって義とされる)、と *Ex fide est iustitia* (義は信仰による)。しかしメランヒトンは、この *iustificatio* は突如としてわれわれの中に完成されるものではなく、われわれの *affectus* が徐々に変えられ、純化される事によって完成に近づくのである⁴⁶⁾、と考えている。そればかりでなく、この二つのテーゼは信仰義認に関係するだけではない。その他まず第一に、次の事に関係する。

「われわれを保持し、新たにし、且つこれを回復せしめる御霊がわれわれの手に入る事に」⁴⁷⁾

「第二に良心の安寧と過去の罪過の除去を受ける事に」⁴⁸⁾

罪が人類の中に入った時から良心は最早人間の善行によってその根源的罪過に対する負い目とそれをもっている事の不安から逃れる事は出来ず、良心の憩う場所はない。しかしこのアウグスティヌスの発想は、アウグスティヌスにおいても又、メランヒトンにおいても同時にそれはただ信仰によってキリストがわれわれの不義を代って負い給うた事を知ってはじめて得られた真の慰めを告白することの反面なのである。

「こうした告白の上に教会が建てられ、陰府の門もこれに対してその力を失っている」⁴⁹⁾

メランヒトンはこう確信をもって語る。だから彼は XIII において異邦人の義とキリスト教的義の区別をした後、再び信仰について勧める。

「汝キリストを信ぜよ、信仰を通してキリストに呼ばわれ、必ずや義と潔めの御霊が偕に在すであらう」⁵⁰⁾

ここにメランヒトンの *pietas* と彼自身が受領していたキリスト教的慰めの実際を見ることが出来よう。

メランヒトンは最後の要約のところで次の様に云う。

「信仰による義 *iustitia ex fide* は業によるのではない、即ちいかなる業も内的性向 *affectus* を変える事は出来ない。信仰のみ *sola fides* 義を手に入れる。即ちわれわれの更新 *innovatio* を手に入れる」⁵¹⁾

メランヒトンにとって義認論の確認は同時に人間の *affectus* の *innovatio* でもあった。*Theol. Inst.* は若きメランヒトンがルターの影響下に立ちつつ、パウロを通じて *Declamatiuncula* とは違った視点から、自分の思想とルターの思想とを闘わせていることの証拠として読まれるであろう。エルンスト・ビーツァー Ernst Bizer はその『約束の神学』においてこの *Theol. Inst.* に言及して、特にその義認論に関して ≪獲得された義は業を拒否し、罪の残滓の残存するにも拘らず、ルターの意味における〈*iustitia formalis*〉ではある。更新が確かに受動的義であるとしても、1519年のいつ頃かにこの義認論がヴィテンベルクのルターの側で彼の眼下で主張された事は注目に値し、又それが公けに講義されなかったとしても、ルターがこのような意味にメランヒトンによって理解されたという事は刺激的なことである⁵²⁾ と云っているのは以上のメランヒトンの言葉をあわせて考えると首肯し得るところである。

この *Theol. Inst.* の性格について、上にあげた Bizer の判断に加えて筆者は *consolatio animi* と *oblectatio*, 又 *ad conscientiae tranquillandam* という語句に特に注意しておく必要があると考える。何故ならこれらの語句はメランヒトンの *pietas* と深い関係があり、次に述べる *Capita* の中に出てくる *promissio* の概念と並んで、彼の若き日の、そして生涯にわたる神学形成の源泉だと思われるからである。Bizer は『約束の神学』において *Capita* 以後の若きメランヒトンに表われた *promissio* の特質を発見したが、この *consolatio* に関しては特に注目しなかった。

IV.

次にヴィルヘルム・マウラーがその成立年代を1520年の4~6月に推定している *Capita*⁵³⁾ を観察する事にする。Bizer は *Theol. Inst.* のメランヒトンと *Capita* のメランヒトンには本質的なイメージの相違が見られる事、ルターから *favor Dei* の概念を恩寵論に導入し、新たに福音と約束の概念連関を追加する一方、*affectus* 説の停滞とは逆に赦罪論の強化が起こっている事を見ている⁵⁴⁾。

Capita は *Theol. Inst.* と同じく罪・律法・恩寵という叙述構造を取っているが、各々の項目は一段と整備され、*Loci* 1521 に近づいている事がわかる。本稿においてはこれらの項目中最後の項目に注目したい。何故ならメランヒトンがルターの感化によって体得した〈*ex fide iustificari*〉及び〈*ex fide est iustitia*〉は *Capita* の第三項目において新しい連関の中で現われるからである。

(1) メランヒトンは〈恩寵について〉の書き出しのところで恩寵が神の *favor*, *benefolentia* の意である事をのべ、この恩寵の業が人間の側に *fides*, *spes*, *Charitas* として生起する⁵⁵⁾、と語った後に次の様に新しい宣言を行っている。

「人間の義認の端初は約束 *promissio* である。そしてわれわれの *iustitia* とは、いわば神の算定 *reputatio** である。キリストによって自己の罪責の除去されたことを人間が信じ、

神がキリストに関して行った御自身の *promissiones* を成就し給うことを信じてはじめて人間は [これを信じるたびに] 義人となり、人を新しくする御霊 *spiritus instaurans* をもつのである」⁵⁶⁾

これは義認が人間の内在的価値や価値行為によって神からの報賞と云う形で人間に供与されるのではなく、キリストの恩寵に絶対的に依存し、もって神が人間の罪責を不問に付し、人間を罪なきものとして扱う一方、人間に義の衣を着せ、更に新しい人間の誕生・成長のために御霊を与える事を述べたものである。そしてこの事態こそ神の約束なのだ、とメランヒトンは主張し、従って義認の淵源はこの *promissio* であると宣言したわけである。

(2) 更にメランヒトンはこの *promissio* と相即不離の信仰の性格を明らかにするために、信仰が *fides Miraculorum*⁵⁷⁾ (奇跡信仰) や *fides Historica*⁵⁸⁾ と区別された *fides iustificans*⁵⁹⁾ (義とする信仰) であることを強調する。

「しかし、本来 *promissio* に結びつけられた信仰は *fides iustificans* であって、このことはパウロが信仰を *promissio* に関連づけているローマ人への手紙第4章やガラテヤ人への手紙第5章 [5節] (<すなわちわれわれは御霊に依り信仰によりて義の希望を待ち望む>) から明らかである」⁶⁰⁾

(3) 次にメランヒトンはこの *promissio* に救済史展望を与えている。創世記第22章18節のアブラハムへの神の約束、イザヤ書第49章8節、エレミヤ書第31章31節、次にエゼキエル書第11章19節、ヨハネ福音書第1章12節、第三にヨハネ福音書第3章36節を引用しつつ、彼は次の様に云う。

「そしてこの様な約束によって精神 *animus* が保護され堅固にされねばならない。それは救いの保証、救いの創始者なるキリストを通して神がわれわれを顧み給うておられることを常に確信するためである」⁶¹⁾

こうしてキリストは人類への救いのしるし *signum*⁶²⁾ となる。ところが旧約においてはこの救いの *signum* は、紅、契約の箱、火の柱、雲という形象 *figurae* の形であらわれ、更に

「預言書は福音にかわるものとして読まれ得るし、福音でもある。福音とはキリストによる赦罪の約束なのである」⁶³⁾

と云って、赦罪の約束の相の下に旧約の救いの実質を述べている。

こうした旧約の様々なしるしの形象の下に提示された *promissio* と云うものは、アダムやエヴァの場合、ノア、アブラハムの場合のように、「非常に不明瞭に提示され、僅かの人しか理解されなかった」⁶⁴⁾ が、約束が成就してはじめて明らかになる類のものである⁶⁵⁾、と云って約束の中核にキリストの位置の重要な事を確認している。更に旧約の約束の意義を、

「更にわれわれも自らの約束をもっている。旧約において人々が自分たちの約束をもっていたように」⁶⁶⁾

と云ってキリスト以後の約束と等しく強調している。メランヒトンはキリスト以後の約束を洗礼、告解、聖餐の形象の中に見ている⁶⁷⁾。

(4) さてこの *promissio* は人間にどのような役割を果すとメランヒトンは考えているのであろうか。彼によれば、人間はその最善の良心の領域においてすら神的存在を憎む傾向にあり、

「人間の諸能力にとって信じるという事は明らかに不可能である」⁶⁸⁾

のだから、従って「信仰は神の恩寵の業」⁶⁹⁾ である、と云う。しかしながらこの恩寵の業は同時に生来の人間の内心に新しい課題として不断の葛藤を生ぜしめる。その時、

「われわれの闘いの武器は救いをもたらす約束 *salutares promissiones* 以外に何も無い」⁷⁰⁾

のであり、この約束が躓きつつ闘う良心の唯一の深い励ましとなり、また慰め *consolatio*⁷¹⁾ となる。ここでわれわれは、メランヒトンの云う *una conscientiae consolatio* という表現に注意を喚起しなければならない。何故なら 1563 年に出たメランヒトンと関係の深いハイデルベルク信仰問答の第一問は、実にこの慰めそのものを主題とし、このカテキズム全体の出発点であるだけでなくまたそのゴールでもある意義をこの *consolatio* に付しているからである⁷²⁾。

(5) 最後の章 *De spe* (希望について) にのべられている約束について見てみよう。

「信仰によって *promissio* は確保される。それだけでなく、更に神の慈愛といつくしみとはこの神の約束を通して確保される」⁷³⁾

そして人間はこの神の約束によって真の敬虔を学ぶのである⁷⁴⁾。

V.

今まで述べて来た様に *Capita* においてメランヒトンは新しく *promissio* の概念を導入し、ルターの義認の神学、カルヴァンの希望の神学、ブーツァーの愛の神学と並んで⁷⁵⁾、約束と慰めの神学への道を開いたのであった。Bizer が指摘するように *promissio* 概念は *Capita* 全体の中では特に *gratia* の項にはじまる後半の部分に集中し、それも本文よりも *Nota* の部分に多く現われるところから、必ずしも本文と注記との関係は明瞭ではない⁷⁶⁾。しかし *promissio* が *Capita* において未だ厳密な構想力を獲得するに到っていないとしても、宗教改革の神学の喜ぶべき多様性への貢献であることに変わりはない。ライプツィヒ討論の聖書原理は宣言以後その内容を深められていったが、メランヒトンにおいてはスコラ神学との訣別を積義の方法とその方法によって引き出された聖書の、特にパウロの使信の宣揚という形で遂行する過程においてなされたのであった。その際、類まれに結ばれたルターの義認論とメランヒトン自身の

約束と慰めの神学的意義との協働は、もはや若きメランヒトンがルターの単なるスポークスマンとして見ることを許さない事を示している。若きメランヒトンの神学的関心がキリスト教真理それ自体の解明というよりも、それが一人の人間を新しく誕生せしめる生ける認識として再構成する事に重心があったことを彼の神学的思惟の展開の中から読み取る事が可能なのである。ルターがキリストを信ずることによって無償に与えられる神の義の中に神認識の本質を発見したのに対して、メランヒトンは神の義が人間の中に新しい存在の誕生とその神学的環境の中に人間認識の本質を発見したと云える⁷⁷⁾。その神学的環境こそ約束と慰めであった。

本稿において初期のメランヒトンの予定論⁷⁸⁾について言及しなかったが、これも約束と慰めの問題と連関性がある。他の機会にこの問題を別に論じる予定である。

註

- 1) 拙稿“A Note on Young Melanchthon in the *De corrigendis adolescentiae studiis* of 1518”, 北見工業大学研究報告, Vol. 7, No. 1, pp. 217-228, を参照。
- 2) Cf. Robert Stupperich, *Melanchthon* (Sammlung Göschen, Bd. 1190), Berlin: Walter de Gruyter & Co., 1960, p. 27. ルター著作集, 第一集, 第1巻, 聖文舎, 1900, pp. 473-573. ルターが本格的にギリシャ語研究に精を出すのは, メランヒトンがヴィテンベルクに来てからであり, しかも後者の聖書講義が人文主義的教育方法にのっとりすぐれた実績をあげていた。Stupperich は前掲書においてメランヒトンの影響力を大きく見ている。聖書原理の確立のためにメランヒトンがルターに与えた影響はその積義の言語学的・歴史批評学的方法と簡明にして要を得たメランヒトンの積義能力である。そしてそれがやがてルターの聖書翻訳において不可欠のものとなっていく。この点に関しては, ウィレム・J・コーイマン, 岸千年訳, ルターと聖書(ルター神学研究双書7), 聖文舎, 1971, Hans Volz, “Melanchthons Anteil an der Lutherbibel”, *ARG*, 1954, pp. 196-232 を参照。
- 3) Cf. StA, I, 10.: Atque haec quidem sunt potissima, quae in contentionem istam universam inciderunt, pleraque alia magis ridicula sunt, quam ut iis te onerare possim alioqui felicius occupatum.
- 4) *Ibid.*, p. 6f.
- 5) *Ibid.*, p. 7f.
- 6) *Ibid.*, p. 8f.
- 7) *Ibid.*, p. 9f.
- 8) *Ibid.*, p. 10.
- 9) *Ibid.*
- 10) *Ibid.*
- 11) *Ibid.*, p. 10.: De quo plerique cum ab Eckio tum a Carolostadio egregiis scripturae locis pugnatum est. mihi sane visus est Paulus 7. cap. ad Romanos no nihil adiuuare sententiam Carolostadii.
- 12) *Ibid.*, passim.
- 13) Cf. *ibid.*, p. 49.: At conciliorum autoritas ita pendet e divinis literis, ut contra eas non liceat quidquam decernere; p. 51: Sed his par est tantum esse autoritatis, quantum per scripturas licet.
- 14) これは中世スコラ神学の形式論理的な訓詁註釈に比して新鮮であるだけでなく, アレゴリカルな解釈に対して事実の解明を旨とするリアリスト的な態度であったことも忘れてはならない。それは教皇の権威・権能や煉獄の問題で典拠にされる聖書語句の解釈に歴然としている。しかし同時にこの聖書の権威の確立は別な問題とつながっており, プロテスタントにおける分派の宿命となったことも事実である。この点に関しては, J・ベリカン, 小林泰雄訳, ルターと聖書(ルター神学研究双書), 聖文舎,

1970, pp. 89-111, を参照。

- 15) Cf. Hans-Georg Geyer, *Von der Geburt des wahren Menschen. Probleme aus den Anfängen der Theologie Melanchthons*, Neukirchen: Neukirchener Verlag, 1965.
- 16) StA, I, p. 35f.: Neque enim in arbitrio nostro est, exturbare regno suo adfectus peccati, qui penitam animi sedem ceu inexpugnabilem arcem tenent, in omnia membra nostra tyrannidem suam exercentes. Deinde……Ex veteribus quidam in homine rationem aurigae vice fungi censuerunt, equos vocarunt adfectus. Sed vincitur adfectu ratio……Quae peccati vis solius Christi beneficio superatur.
- 17) Ibid., p. 31.: Tyrannidem suam exercet in nos multiplex cupiditas.
- 18) Ibid.: Adversatur interim sive ratio, sive lex; bellum ipsi nobiscum infelices germus adsiduuum.
- 19) Ibid., p. 36.: erigi hominum animos ad virtutis studium.
- 20) Ibid.
- 21) Ibid., p. 34.: Nonnullam animi iacturam in philosophorum literis puer feci, quam, ut spero, feliciter olim doctrina Pauli sarciet. Errant enim meo iudicio tota vita, qui philosophorum literis iuvari vitae Christianae rationes censent. Sola enim Christiana doctrina efficax est ad excitandos inspirandosque animos, id quod Apostoli fatebantur, cum aeternae vitae sermonem Christi philosophiam vocabant, qui unus et vita et veritas et lux et via est; contra, hominum placita mors, mendacium, tenebrae et error.
- 22) Ibid.
- 23) Ibid., p. 36.
- 24) Ibid., p. 37.: Et batenus quanta iactura scholae Theologicae Paulum neglexerint, horreo dicere.
- 25) Ibid.
- 26) Cf. ibid., p. 40f.: Gratia Christi est, quam neglectim universa recens Theologia tractat, Paulus vero copiosissime persequitur.
- 27) Ibid., p. 31.: Siquidem Christum novisse non modo est res eius gestas tenere, sed grato animo beneficium complecti.
- 28) Ibid., p. 38.
- 29) Ibid.
- 30) この affectus は情念乃至は内的性向をあらわす語であるが、初期のメランヒトンの思想の中で非常に重要な用語である。これはやがてロキの初版 (1521) の自由意志をめぐる問題のところを出てくるのであるが、すでに 1519 年の *Declamatiuncula* に顔を出していることに注意をうながしておきたい。Cf. Heinrich Bornkamm, “Melanchthons Menschenbild”, *Philip Melanchthon. Forschungsbeiträge zur vierhundertsten Wiederkehr seines Todestages*, hrsg. von Walter Ellinger, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1961, pp. 76-90. Hans-G. Geyer, op. cit., p. 287.
- 31) StA, I, p. 42.
- 32) Cf. 本稿 IV の (4).
- 33) この二文書の成立に関しては以下の書を参照のこと。Th. Kolde, *Die Loci communes Philipp Melanchthons in ihrer Urgestalt*, Leipzig: A. Deichert, 1924⁴. Paul Joachimsen, “Loci communes. Eine Untersuchung zur Geschichte des Humanismus und der Reformation”, *Lutherjahrbuch*, 25, 1926, pp. 27-97. 新らしくは Wilhelm Maurer, “Zur Komposition der Loci Melanchthons 1521. Ein Beitrag zur Frage Melanchthon und Luther”, *Lutherjahrbuch*, 1958, pp. 146-180. Idem, “Melanchthons Loci von 1521, als Wissenschaftliche Programmschrift. “Ein Beitrag zur Hermeneutik der Reformationszeit”, *Lutherjahrbuch*, 27, 1960, pp. 1-50. *Theologica Institutio* 及び *Capita* は *Loci* 1521 に至る若きメランヒトンの思想の体系化の過程を示している。本稿においては本文校訂上信頼のおける Ernst Bizer, hrsg., *Texte aus der Anfangszeit Melanchthons*, Neukirchen: Neukirchener Verlag, 1966 (略号 BT とする), 90 頁以後の本文を用いている。

- 34) こうした考え方は、人文主義者一般に見られ、中世スコラ学の煩瑣で不毛な形式論理を駆使した議論の仕方に対する拒否的態度であり、Calvin にも見られる。しかし、この *utilitas* という考え方は単なる実用性という事を意味せず、人間存在に対するより直接的、具体的関心を表わすものと考えられる。
- 35) Cf. BT, p. 90.: *Nam tribus his summa iustificationis nostrae comprehenditur.*
- 36) このことは中世スコラ神学の *summa* 形式と比較するとよくわかるであろう。
- 37) この用語の内容については II の (4) で述べたが、用語自体はエラスムスの *beneficium dei* に発しているが、メランヒトンはこれを宗教改革の神的核心である <キリストの救いの御業> に限定した。Cf. Michael Rogness, *Melanchthon, Reformer without Honor*, Minneapolis: Augsburg Publ. House, 1969, pp. 8f. & Note 12 (p. 142).
- 38) BT, p. 90.
- 39) *Ibid.*: *Apparet autem voluisse hac epistola Paulum orbi Christum et gratiam Christi proponere, ut exacta quadam disputatione recte cognosceretur Christus esse auctor iustitiae nostrae.*
- 40) *Ibid.*, p. 92.
- 41) Cf. Wilhelm Maurer, "Lex spiritualis bei Melanchthon", *Melanchthon-Studien* (=SVRG, Nr. 181), 1964, pp. 103-136. 特に II. *Lex spiritualis beim jungen Melanchthon* の項, pp. 108-127. H.-G. Geyer, op. cit., pp. 140-180.
- 42) BT, p. 93.
- 43) Cf. *ibid.*, p. 94.: *Sic oportet contrarium quendam affectum in pectoribus nostris creari, quo nostra sponte, etiamsi nulla esset lex, ad bona rapimur. Hic affectus meritus est per Christum et gratia dicitur.*
- 44) *Ibid.*: *fides adsensus constans verbi divini, et hac illuminamur et deus nobis ostenditur.*
- 45) *Ibid.*: *Ex amore spem nasci manifestum est.*
- 46) *Ibid.*, p. 95.: *et iustificatio non semel tota in nobis absoluitur, sed subinde affectus purgantur et mutantur.*
- 47) *Ibid.*: *Ad impetrandum spiritum perseverantem et innovantem et instaurantem nos.*
- 48) *Ibid.*: *Deinde et ad conscientiam tranquillandam et abolendum peccatum praeteritum.* Cf. Note 31).
- 49) *Ibid.*, p. 96: *Illa confessio est super quam ecclesia fundata est, contra hanc portae inferorum non praevalerunt.*
- 50) *Ibid.*, p. 97.: *Credere Christo, invoca Christum per fidem, iam spiritus iustificator et pulgator adest!*
- 51) *Ibid.*: *Iustitia ex fide sine operibus, id est, nullum opus potest affectum immutare, sed sola fides impetrat iustitiam, hoc est innovationem nostri.*
- 52) E. Bizer, *Theologie der Verheißung. Studien zur Theologie des jungen Melanchthon 1519-1524*, Neukirchen: Neukirchener Verlag, 1964, p. 39.
- 53) W. Maurer (1960), p. 2 (Anm. 3).
- 54) E. Bizer, op. cit., p. 40. 特に Bizer は <promissio> に関して、p. 44. の注 (33a) において Neuser や Sperl らが若きメランヒトンの研究に際してこの <promissio> の意義を発見出来なかったという。Bizer の指摘するように重要なことはメランヒトン自身がこの *promissio* の発見をもって中世スコラ神学と自己の神学の重大な相違を主張していることである。メランヒトンは、神学研究においてこの <promissio> が熱心に教え込まれる必要を説いている。BT, p. 123.: *Hoc solum est studium theologiae in exercendis promissionibus, qua valde necessarium est.* そして *Loci* (1521) においては <promissio> の意義がスコラ神学との対決の形で語られている。StA, II/1, p. 106.: *Quaeso autem, ubi promissionum scholastica theologia vel verbo non pignus misericordiae, sed legislatorem et exactorem multo tristioerem faceret, quam Moses etiam visum est.* 更に StA, II/1, p. 94.: *scholastica fides nihil nisi mortua opinio est. Nam quomodo credunt omni verbo dei, qui promissam remissionem peccatorum non credunt?*
- 55) BT, p. 120.

- 56) Ibid., p. 121.: Principium humanae iustificationis est promissio. Et iustitia nostra est quaedam reputatio* divina. Cum credat homo peccatum suum abolitum esse per Christum, Et credat deum satisfacturum suis promissionibus de Christo, Et iam homo (cum haec credit) iustus est et habet spiritum instaurantem.
- *印の〈reputatio〉は、のちにメランヒトンは類縁語の〈imputatio〉という概念に昇華させるが、1519-1520年においては使用されていない。尚ルターには〈iustitia aliena〉という用語があるが、これも〈reputatio〉と同一線上に解釈してよい。宗教改革の義認論は、このような〈転嫁された義〉ないしは〈義の転嫁〉という考え方をとって、ローマ・カトリックの功德思想と激しく対立した。ジュネーブの宗教改革者のカルヴァンも *Institutio* において〈imputatio〉を明確に主張している。Cf. Inst., III, 11, 2. カルヴァンについては特に François Wendel, Calvin, source et évolution de sa pensée religieuse, Paris: PUF, 1950, p. 195f. を参照。
- 57) BT, p. 121.
- 58) Cf. ibid., p. 90. 及び本稿, p. 206.
- 59) Ibid., p. 121.
- 60) Ibid.: Sed fides proprie relata ad promissionem Est fides iustificans, sicut patet E capite quatro ad Romanos, ubi fidem Paulus refert ad promissionem, et ad Galat. quinto [vs. 5.:] „Nos enim spiritu ex fidē spem iustitiae expectamus“. この一文が載っている De fide の項でメランヒトンは信仰という意味の多様性を認めながらも、奇蹟を信じたり、Livius や Sallustius の如き立派な信念をもった歴史家たちを信ずるとするような憶見 (opinio) とは違って、つまり歴史や事実の偉大を認め、これを信ずるとする信仰態度ではなく、神の人間に対する永遠の救いの約束にあずかっていく、という態度が主張されている。ここに信仰義認が単に人間の主観的決断に依頼することなく、客観的な世界ないしは歴史的世界の認識に根ざし、永遠の世界への展望を得る要として〈promissio〉が、若きメランヒトンの神学的思惟の中に入ってきていることがわかる。Luther が信仰義認をパラドックスの形で語ったとすれば、メランヒトンはそれを他概念との構造連関において語ることにより教育的・説明的な効果をあげたといえる。
- 61) Ibid. 122.: Et huiusmodi promissionibus animus muniendus et confirmandus, ut semper confidat deum favere nobis per Christum, Qui et pignus et autor salutis.
- 62) BT, p. 122.
- 63) Ibid.: Prophetiae possunt legi euangelij vice sunt vere Euangelium. Euangelium est promissionis per Christum.
- 64) Ibid., p. 123.
- 65) Ibid.: …clarior reddita est promissio, donec veniant huic promissioni. この問題は旧約と新約の類似と相違の關係の神学問題であるが、ルター派圏におけるメランヒトンと改革派圏のカルヴァンの二人の改革者は共に人文主義の教育を受けたものであるところから、この問題について救済史の見解をとり、かつ旧約・新約の關係を単に約束と成就という図式で割切ることなく、福音以前(キリスト以前)の旧約にもなお福音の性格をみとめたことは重要である。この問題についてメランヒトンは *Loci* 1521 で更に詳論することになる。カルヴァンについては *Inst.* II, 9-10 を参照。Cf. John Hesselink, “Calvin and Heilsgeschichte. «Divina oeconomia in dispensano foedere»”, *OIKONOMIA, Heilsgeschichte als Thema der Theologie* (Oscar Cullmann zum 65. Geburtstag gewidmet), Hamburg-Bergstedt: Herbert Reich Evang. Verlag, 1967, pp. 163-170.
- 66) BT, p. 124.: Habemus ergo nos nostras sicut in vetere testamento habuerunt suas promissiones.
- 67) しかしながら Bizer も指摘しているように、宗教改革の共通の認識となったところの教会の標識のひとつとしての「説教」を挙げていない。Cf. Bizer, op. cit., p. 43.
- 68) BT, p. 125.: Humanis viribus plane impossibile est credere,...
- 69) Ibid.: ...divinae gratiae opus esse fidem probat,...
- 70) Ibid.: Arma nostrae militiae non sunt nisi salutare promissiones.
- 71) Cf. BT, p. 126.: Sicut haec una est conscientiae consolatio.
- 72) ハイデルベルク信仰問答は最初プファルツの選帝侯フリードリヒ3世の要請でメランヒトンに助言が

求められた。メランヒトンは以前フリードリヒ2世の時に2度ハイデルベルク大学の教授になるように招聘を受けたことがあり、彼はそれを謝絶した経緯があった。しかし彼はプファルツの宗教改革に助言し、1557年には個人的にハイデルベルクに赴きオットー・ハインリヒの許でこの大学を福音主義的な基盤に立って再編成する仕事を助けた。しかし残念なことにメランヒトンは1560年に地上の生涯を閉じた。けれどもフリードリヒ3世が、このカテキズム作成のために招いた2人の神学者は、ひとりヴィテンベルクのメランヒトンの許で7年間学んだことのある Zakharias Ursinus と Caspar Olevianus とであった。Ursinus の学識と Olevianus の説得力と教会政治の卓越した才能が用いられた。彼らの作成したカテキズムの第1問は、Was ist dein einziger Trost im Leben und im Sterben? (同時に上梓されたラテン語版では Quae est unica tua *consolatio* in vita et in morte? であった。われわれはここに〈consolatio〉の精神的脈絡を肯定することが可能であると考える。Cf. Philip Schaff, *The Creeds of Christendom*, Vol. 1, The History of Creeds, Michigan: Baker Book House, 1931⁶, pp. 529-554.; Zacharias Ursinus, *The Commentary on the Heidelberg Catechism*, tr. by G. W. Williard, 1956, Michigan: Eerdmans, 1956. またこのカテキズムの成立史に関しては、Heinrich Graffmann, *Geschichte der Entstehung und Methodik des Unterrichts im Heidelberger Katechismus*, Neukirchen: Neukirchener Verlag, 1961.

73) BT, p. 131.: Fide apprehenditur promissio atque adeo bonitas et misericordia dei per promissionem divinam.

74) Cf. *ibid.*, p. 126.: Das macht recht fromm.

75) Cf. T. F. Torrance, *Kingdom and Church, A Study in the Theology of the Reformation*, Edinburgh: Oliver & Boyd, 1956.

76) Bizer, *op. cit.*, p. 45.

77) 神認識と人間認識の相関性や両極性については、後にカルヴァンがこれを定式化することになる。この二重の認識 *duplex cognitio* については現代神学の中でバルトとブルンナーとの間に論争が行われた、この問題は、深くは宗教改革と人文主義の関係にその淵源がある。カルヴァンは OS, III, 31: *Tota fere sapientiae nostrae summa, quae vera demum ac solida sapientia censi debeat duabus partibus constat, Dei cognitione et nostri.* といっている。Cf. Edward A. Dowey, *The Knowledge of God in Calvin's Theology*, New York & London: Columbia Univ. Press, 1965², pp. 41-49; pp. 247ff.

78) Cf. Rolf Schäfer, "Zur Prädestinationslehre beim jungen Melanchthon", *ZThK*, 63/3, 19, pp. 353-378.

Hans-Georg Geyer, "Zur Rolle der Prädestinationslehre Augustins beim jungem Melanchthon", *Studien zur Geschichte und Theologie der Reformation* (Festschrift für Ernst Bizer), hrsg. von Luise Abramowski und J. F. Gerhard Goeters, Neukirchen: Neukirchener Verlag des Erziehungsvereins GmbH, 1969, pp. 175-187.

参 考 文 献

Bizer, Ernst: *Theologie der Verheissung, Studien zur Theologie des jungen Melanchthon 1519-1524*. Neukirchen: Neukirchener Verlag des Erziehungsvereins GmbH, 1964.

Idem, hrsg.: *Texte aus der Anfangszeit Melanchthons*. Neukirchen: Neukirchener Verlag des Erziehungsvereins GmbH, 1966.

Bornkamm, Heinrich: "Melanchthons Menschenbild", *Philipp Melanchthon, Forschungsbeiträge zur vierhundertsten Wiederkehr seines Todestages*, hrsg. von Walter Ellinger, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1961, pp. 76-90.

Fraenkel, Peter: "Revelation and Tradition", *Studia Theologica*, 1959, pp. 97-133.

Fraenkel, Peter-Greschat, Martin: *Zwanzig Jahre Melanchthonstudium, Sechs Literaturberichte (1945-1965)*. Genève: Librairie Droz, 1967.

Geyer, Georg-Hans: *Von der Geburt des wahren Menschen, Probleme aus den Anfängen der*

- Theologie Melancthons*. Neukirchen: Neukirchener Verlag des Erziehungsvereins GmbH, 1965.
- Hartfelder, Karl: *Philipp Melancthon als Praeceptor Germaniae*. Nieuwkoop: B. de Graaf, 1972 (reprint of 1889).
- Maurer, Wilhelm: "Zur Komposition der Loci Melancthons von 1521", *Luther-Jahrbuch*, 1958, pp. 146-180.
- Idem: "Melancthons Loci von 1521 als wissenschaftliche Programmschrift", *Luther-Jahrbuch*, 1960, pp. 1-50.
- Idem: "Lex spiritualis bei Melancthon", *Melancthon-Studien* (=SVRG, Nr. 181), 1964, pp. 103-136.
- Idem: *Der junge Melancthon*, Bd. 1. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1967.
- Neuser, Wilhelm: *Der Ansatz der Theologie Melancthons*. Neukirchen: Neukirchener Verlag des Erziehungsvereins GmbH, 1957.
- Idem: *Luther und Melancthon, Einheit im Gegensatz (Theologische Existenz Heute, Nr. 91)*. München: Chr. Kaiser, 1961.
- Pauck, Wilhelm: "Luther and Melancthon", *Luther und Melancthon*, hrsg. von Vajta, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1961, pp. 11-31.
- Rogness, Michael: *Philipp Melancthon, Reformer without Honor*. Mineapolis: Augsburg Publ. House, 1969.
- Schwiebert, Ernest: *Luther and His Time*. St. Louis: Concordia Publ. House, 1950.
- Idem: "New Groups and Ideas at the Udiversity of Wittenberg", *ARG*, 1958, pp. 60-79.
- Sperl, Adolf: *Melancthon zwischen Humanismus und Reformation*. München: Chr. Kaiser, 1959.
- Stupperich, Robert: *Melancthon* (=Sammlung Göschen, Bd. 1190). Berlin: W. de Gruyter, 1960.
- Volz, Hans: "Melancthons Anteil an der Lutherbibel", *ARG*, 1954, pp. 196-232.